

美術シソーラスの問題点

—シソーラスの試作とその検討—

Development of the Thesaurus of Fine Art

伊 藤 可 恵

Kae Ito

上 田 修 一

Shu-ichi Ueda

Résumé

It is the purpose of this paper to identify and solve problems on developing the thesaurus of fine art as result of the trial development by Japanese language.

Art information has some unique characteristics; (1) variety of items to be indexed, e. g. art original, art reproduction, literature, etc.; (2) variety of access points, e. g. personal names, titles, names of collections, themes of art, etc.; (3) ambiguity of art terms.

The trial development of the thesaurus of fine art is carried out as follows; (1) gathering terms from *Japanese Periodical Index* and *Shincho Encyclopedia of World Art*; (2) selecting preferred terms; (3) establishing main categories (Architecture, Sculpture, Painting, Applied Art, Style and School, History, Theme and Motif, Material, Print, Theory); (4) grouping preferred terms.

As the results, it is found that preferred term should be gathered from exhaustive art encyclopedias and specific art cyclopedias, cross reference is very important factor, and sub-categorization should be appropriated to characteristics of main categoris.

- I. 美術分野のシソーラスの特色
 - A. 美術情報の特色
 - B. 美術分野のシソーラスの状況
- II. シソーラスの作成と評価
 - A. 目的
 - B. 範囲

伊藤可恵：山之内製薬株式会社特許部，東京都板橋区小豆沢 1-1-8

Kae Ito: Patent Department, Yamanouchi Pharmaceutical Co. Ltd., Azusawa 1-1-8, Itabashi-ku, Tokyo.

上田修一：慶應義塾大学図書館・情報学科助教授，東京都港区三田 2-15-45

Shu-ichi Ueda: School of Library and Information Science, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo.

美術シソーラスの問題点

- C. 構成
- D. 作成
- E. 各カテゴリーの検討
- III. 美術シソーラスの問題点
 - A. 作成上の問題点
 - B. 美術分野のシソーラスの作成に関する留意点
- IV. おわりに

I. 美術分野のシソーラスの特色

A. 美術情報の特色

1. 美術の範囲

「美術」は、通常、「美を表現する技術、即ち芸術。空間並びに視覚の美を表現する芸術、即ち造形美術。絵画、彫塑、建築、工芸美術など」（広辞苑）と理解されている。日本十進分類法には、「芸術」として、彫刻、絵画、版画、写真、工芸が列挙されており、国立国会図書館分類表、デューイ十進分類表、国際十進分類等では、これらに建築を加えたものを美術の範囲とみなしている。

Fawcett, T. は、従来の分類においては、美術は人間の他の行動や表現、つまり歴史的、考古学的、人類学的、社会学的な研究から切りはなされてきたと述べており、美術の境界をあらかじめ定めてしまうことに疑念を表明している¹⁾。ちなみに米国議会図書館件名標目表では、芸術に関連する件名として、ナショナリズム、自然、精神分析、宗教など36の標目があげられている。

このように美術を扱うにあたっては上記のカテゴリーを主体とするにしても、様々な他の分野との関連もまた重視されなければならない。

2. 美術分野の情報の種類

Rinehart, M. は、芸術史のドキュメンテーションにおいては、一次資料と二次資料とが同じように扱われ、特別な形の資料（たとえば展覧会や競売の目録など）もその対象となり、探索のタイプでは、カレント・アウェアネスは少なく趣及的探索が多くなるという特色があると述べている²⁾。

美術の鑑賞および美術分野における研究では、第一に作品が重要である。作品には模写や写真などの代替物があり、また作品の管理記録がある。また美術の鑑賞や研究においては作品のみでは不十分であることも多く、作品や作者について記述した資料も必要とされる。従っ

て、美術分野の情報処理では、次のような処理対象が考えられる。

- (1) 作品（絵画、彫刻、建築物、写真）
- (2) 作品の代替物（模写、複製、スライド、写真など）
- (3) 作品の管理記録（所蔵館、履歴、貸出記録など）
- (4) 作品に関する記述（作品研究など）
- (5) 作者に関する記述（作家研究など）
- (6) 作品の代替物の記述（媒体の記述）

このように美術情報には、大きく分けて作品および作品に付随する要素といわゆる文献とがあり、本稿では両者を対象としてシソーラスを考えていくことにする。

3. 美術情報のアクセス・ポイント

こうした美術情報を検索するアクセス・ポイントとして、作品に関しては、たとえば絵画であるなら作品名、作者名、所蔵館名、地名、材料、流派、画題などがある。一方、文献に関しては、その文献が特定の作品を論じているならば、書誌事項に加えて上記の作品に関する諸要素がアクセス・ポイントとなりうる。

一般的に、アクセス・ポイントの統制・管理を行なう手段としては、典拠管理とシソーラスによる管理とが考えられる。この点からみて、美術情報のアクセス・ポイントには次のような管理面での留意点がある。

a) 個人名

美術に係わる個人名として、作者、批評家、鑑定者、美術商、後援者、収集家などの名称がある。一方では、作者の名称が流派名となる（宗達派など）例もあり、また歴史上の人物が画題として取り上げられることもありうる。

個人名の大多数は、シソーラスには含めず典拠管理の対象としたほうがよい。一方、流派名となる人名などはシソーラスに含めることになろう。

b) 作品名

作品名の中には、作者自身がつけたものでないものがあるうえに、「山水図」、「聖母像」など同名のものも多

い。つまり作品名は識別力が乏しい。個々の作品を識別するためのアクセス・ポイントとするには、「東京国立博物館保管「葡萄垂架図」」、「乾山筆「花鳥画」」のように、所蔵館名、作者を付記する必要がある。

作品名が作品の内容を表わさない場合が多く、描かれている対象、すなわち、画題、芸術表現の対象からのアプローチができるようにしておかなければならないため、これらの対象もシソーラスに含めることになる。

c) 所蔵館名

所蔵館名が、作品にアプローチする際に、かなり確実な手がかりとなりうるのは、美術分野の特色のひとつといえる。所蔵館名の一種として、コレクターとしての個人名がある。

こうした所蔵館名も典拠管理の対象となる。

d) 展覧会名

展覧会名の果す役割は、所蔵館名の役割とほぼ同じである。ただし、所蔵館は永続的であるのに対し、展覧会は一時的で、名称などを確定しにくいという問題がある。さらに一つの作品が複数の展覧会に出品されることも多い。従って、展覧会目録をもとにした典拠管理を行なう必要が生ずる。

e) 地名

美術作品は、特定の地域や場所と密接に結び付いているため、地名は重要なアクセス・ポイントとなる。しかしながら、美術では過去の地名が特に重要となるため、その歴史の変遷の典拠管理を要することになる。

f) 画題など

作品名からの探索とともに、画題、芸術表現あるいは図像学的な対象、題材などからのアクセスが考えられ

る。国際十進分類法では、これらを第1表のように区分している。

これらの画題などからのアクセスのためには、あらかじめ画題を作品名等とともに、列挙しておく必要がある。特に日本では『青花牡丹唐草文瓶』のように桜や梅などの樹木、特定の動物、波や月などの自然物が、絵画の画題としてばかりでなく、工芸品や着物の柄などにも使用され、それぞれが作品名として用いられることが多い。こうした代表的模様を列挙しておくことにより、絵画、陶芸、染色という手法をこえた探索手段を提供できるようになる。

こうした画題などは、シソーラスの収録対象となろう。

4. 美術用語の問題点

どの分野でもみられることであるが、美術に関する用語も統一されておらず、各用語の定義や意味は不確かである。Fawcett, T. は次のような例をあげている。

「Portuguese Painting」の Portuguese という形容詞は、場所を表わしており、年代や様式を示すものではない。しかしポルトガルにおいて描かれた絵なのか、ポルトガルでポルトガル人芸術家によって描かれたものなのか、あるいは場所を問わずポルトガル人によって描かれたものなのかは明確ではない。また、「Byzantine Painting」の Byzantine は、様式、時代、さらにキリスト教の特殊な様式に係わるだけでなく地域をも示す上、このことば全体で「Painting」派、モザイクをも意味している。また「Flemish Painting」は北西ヨーロッパの特定の地域で製作された作品を含むと共に、写実派の油絵も意味する。

また、概念をあらわす語は他の言語において同意語があるとは限らない。たとえば、「design」は、フランス語に正しく翻訳することはできない³⁾。

そこで、Fawcett は、これらの用語の混乱、その使用法のあいまいさを回避するために、言葉の意味と用語の使用法の規則を規定する国際的な用語集とシソーラスの開発が必要であるとした。そして、規則を定めるべき用語として次のような種類をあげている。

1) 意味のあいまいな用語

(例: Miniture, Symbolism, Graphic)

2) 意味の類似している用語

(例: Ethnic と Vernacular と Primitive と Native と Folk, また Popular と Tririal と Kitsh)

3) 時代区分に関する用語

第1表 UDC 固有補助標数「.4」

.04	芸術表現の対象, 図象学, 題材……246
.041	人物, 人体, 肖像, 風俗……572, 743
.042	動物, 架空の動物…59
.043	植物, 樹木, 花, 果物……58
.044	歴史的事件; 戦争, 祝祭, 式典, 報道……394
.045	比喩, 抽象, 象徴; 死(骸骨)の舞踏
.046	神話, 宗教的題材
.047	自然の表現, 風景, パノラマ (2)により細分
.048	模様や線の装飾; から草模様, グロテスク 模様
.049	その他の題材; 思想, 観念, 風刺

出典: 国際十進分類法, 1974.

美術シソーラスの問題点

- 3) 地名 (ドイツ, ブルゴーニュ, コンスタンチノーブルなどのような国境の変遷に係わる問題や, 町, 遺跡, 各国の地方の名称は直接標目とするのか, 国名のもとに含めるのかという問題がある。)
- 5) 文化と文明の名称
(例: ギリシャ, バイキング, イスラム, ベニン)
- 6) 様式, 流派に関する用語
(例: 国際ゴシック, カラバギスキ, バルビゾン, アール・デコ, カムデンタウングループ)
- 7) 芸術家, 作品, 記念物の名称
美術分野における情報検索を効果的に行うためには, これらの用語にかかわる問題をシソーラスによって解決を図ることが必要となっている。

B. 美術分野のシソーラスの状況

1. 主題索引と件名標目
Peterson, T. は, 現在の芸術の二次資料は次のように大きく分けることができると述べている⁴⁾。
 - (1) 包括的な二次資料
(例: Art Index, Repertoire International de la Littérature de l'Art (RILA), Repertoire d'Art et d'Archeologie, Arts and Humanities Citation Index)
 - (2) 一部の分野を扱う二次資料
(例: Architecture Periodical Index, Avery Index to Architectural Periodical)
 - (3) 芸術作品の図象学的な内容を扱う二次資料
(例: 写真やスライドのコレクションのための索引)

そこで, シソーラスの問題を検討する前に, 現在の芸術分野における二次資料とそこで用いられている件名標目の種類, 特徴を概観してみる。

まず, 美術分野に限らない, 包括的な件名標目表として, 米国議会図書館件名標目表 (Library of Congress Subject Headings, LCSH) がある。LCSH は, 1980年に第9版が出版され, 北米で広く使用されている。近年, LCSHの「Art」関係の標目は, 北米芸術図書館協会 (The Art Libraries Society of North America, AGRIS/NA) のもとで検討が加えられてきている^{3,5,6)}。LCSHでは, 「ART」と「ARTS」とを区別していたり, 転置形を用いていたいたりして, 多少わかりにくい面もあるが, 美術に関する地域, 時代, 様式, 技法, 理論ばかりでなく, 美術と他分野との関係を示す標目も広範囲に網

羅しており, 美術に関してだけみても, 包括的で詳細な件名標目表として評価できる。

このLCSHを使用した索引誌として, RILA, Art Index, Avery Index to Architectural Periodical がある。しかし, これらの索引誌ではこれをそのまま使用しているわけではなく, それぞれの分野や方針に適合するように変更を加えている。

LCSHを使用しない二次資料としては, Architectural Periodical Index (RIBA), Art Bibliographies Modern (ABM), Public Archives of Canada などがある。

また, 美術作品を図象学的な見地から扱っている図書館や機関である,

- (1) The Slide and Photograph Archives of Library of Congress
- (2) National Collection of Fine Arts
- (3) Photo Archive at the Yale Center for British art
- (4) Image Access Society
- (5) Bodleian Library (Oxford University)

の件名標目や索引システムがある。Bodleian Libraryでは, Ohlgren, T. H. によるものが使われている。

以上のようにさまざまな形で美術に関する主題索引が作成されているが, 個々の主題索引は独自のものであり, 相互の調整はなされていない。そのため, 件名標目や索引システムは個々の二次資料の書誌事項へのアクセスや各図書館が自館の蔵書にアクセスするための手段となっているにすぎない。

近年, 索引作業と検索のための標準的な用語集やシソーラスを作成する計画がある。その例として,

- (1) The Picture Division Thesaurus of Iconographic Terms of Public Archives of Canada
- (2) The Photography Index developed at the Yale Center for British Art
- (3) The Art and Architecture Thesaurus (AAT)

があり, いずれも美術シソーラスの作成に取り組んでいるといえる。(1)と(2)ではその対象をカナダや英国の美術に限定しているのに比べ, (3)のAATは包括的なシソーラスを意図した計画である。AATは, 1979年に, Crouch, D., Molholt, P., Peterson, T.ら3名が中心となって開始されたものである。最初に, この分野の既存のシソーラスを検討した結果, 現在のところ包括的で標準的な用語集は存在しないことを確認した。そこ

で、索引作成者にとってはディスクリプタを選択するための典拠リストとなり、検索者にとっては必要な情報や探索対象を教えるガイドとなるようなシソーラスを作成することとした。1981年には、建築分野のシソーラスが着手されている。また、美術分野に先立って装飾芸術 (Decorative Arts) に関するシソーラスの開発を進めているが、Molholt は、装飾芸術からとりかかるのは、"この分野のシソーラスの開発は難しく、芸術に関して解決しなければならない問題を網羅しているからである"⁷⁾と述べている。また、シソーラスの構成はアルファベット順と階層構造のリストとする、用語の選択においては既に行われた他のプロジェクトの作業は繰返さず、広く使用されている LCSH とは矛盾しないようにするなどの方針を定めている^{4,7,8,9,10)}。

以上のように現在の美術分野のシソーラスの状況においては、美術に関する用語の使用法に標準的な規則がないため、用語の使用上の混乱や誤解が生じている。また、個々の機関が独自に分類、索引法を開発し、相互の調整がなされていないことから、未だ「基準」となるものをつくるという意図でシソーラスの作成がすすめられる傾向がある。

II. シソーラスの作成と評価

A. 目的

このように美術をとりまく用語は、複雑でしかも広範囲にわたっている。そこで本稿では、主題からの探索を行なえるようにするために、用語に一定の枠を与えてその定義を行なう可能性をさぐるために、シソーラスの作成を試みる。

B. 範囲

「美術」は、I章で述べたように範囲を定めにくいですが、ここでは日本十進分類法に「建築」分野を加えたものを「美術」とみなすことにする。

また、文献ばかりでなく作品そのものにもアクセスできるように考慮する。

C. 構成

構成は、カテゴリごとにタームチャートで表現し、同義関係 (USE, UF で表示)、階層関係 (BT, NT で表示)、関連関係 (RT で表示) を表示する。

表記は日本語とし、外国語は、カタカナ表記とする。倒置形式はとらず、ダイレクト・エントリとする。

D. 作成

シソーラスの作成手順は、

- (1) 用語の収集
- (2) ディスクリプタの選定
- (3) ディスクリプタ間の関係の決定 (カテゴリーの設定)
- (4) 編成

とに大きく分けることができる。

1. 用語の収集

美術情報に関係する用語を収集するために、まず語彙調査をおこなった。

a. 用語の収集対象

用語の収集対象として、統制語を含む資料、すなわち、用語集、シソーラス、件名標目表、分類表、規格など、と文章を含む資料、すなわち、雑誌、図書、レポート、パンフレット、カタログ、文書、という二種類の対象が考えられる¹¹⁾。ここでは、双方から美術に関する用語を調査するため、

- 1) 新潮世界美術小辞典
- 2) 国立国会図書館 雑誌記事索引 (人文, 社会編) 芸術芸能 累積索引版 1975~1979年 日外アソシエーツ

を用語の収集対象とした。「新潮世界美術小辞典」は、雑誌「芸術新潮」(東京, 新潮社)の第21巻, 1号(昭和45年1月)から27巻, 9号(昭和51年9月)まで81回にわたって分載されたわが国で最も項目数が多く網羅的な美術辞典である(なお、一部改訂されて「新潮世界美術辞典」(新潮社, 1985)となった)。全体の項目数は、約16,000項目で、3,200項目程度が主題を表わすとみられる。また内容は、西洋27%、日本34%、東洋27%、他12%となっており、この比率はわが国の美術シソーラスの情報源として妥当と考えられる。

一方、美術の分野においては、科学技術分野における抄録誌のように能率的に語を抽出できる文献が少ない。特に日本においては、Art Index や Arts & Humanities Citation Index のような索引誌が存在しないので「雑誌記事索引」の論文のタイトルから統制されていない一般的な用語を収集することとした。

b. 抽出方法

「新潮世界美術小辞典」では、西洋編のみを調査対象とした。項目はそのまま抽出し、その際に用語を建築、彫刻、絵画、工芸、版画・印刷、材料・技法、題材・文

美術シソーラスの問題点

様、様式・流派、文化・歴史、商業美術、美術一般理論、作者、その他の個人名、作品名、地名という15のカテゴリーに便宜的に分類し、出現頻度を集計した。

「雑誌記事索引」は、標目「芸術史、美術史」と「絵画」から用語を抽出した。主として名詞を抽出したが、作者名、個人名、作品名は収集対象としなかった。標題だけからでは作品名なのか、画題としてとられている用語なのか、判断できない場合には、画題となることの多い作品名は抽出した。なお、この調査に先立ち、同索引の「陶芸」の分野で調査をおこなったが、その際、出現頻度は高いが、主題となりえない用語（たとえば、関係、中心、形態、考、究明、など）について列挙し、今回の抽出対象からはずした。

c. 抽出結果

第2表は、「新潮世界美術小辞典」(西洋編)の分野毎の用語数である。

また、雑誌記事索引(美術史、芸術史、絵画、書)では、

論文数	3,642 件
のべ語数	2,631 語
人名数	2,219 語

となっている。両者の結果から美術に関する用語の特色である個人名、作品名、地名という固有名詞の占める割

第2表 新潮世界小辞典 西洋編の項目数

	項目数	比率
建築	321	7.3%
彫刻	51	1.2%
絵画	155	3.5%
工芸	159	3.6%
版画・印刷	96	2.2%
材料・技法	131	3.0%
題材・文様	397	9.0%
様式・流派	162	3.7%
文化・歴史	68	1.5%
地名	386	8.8%
作者	1,742	39.7%
作品名	465	10.6%
他の人名	76	1.7%
その他 (美術理論等)	168	3.8%
商業美術	12	0.3%
全項目数	4,389	100.0%

『新潮世界美術小辞典 西洋編』より集計

合が大きいことがわかる。

2. ディスクリプタの選定

日本科学技術情報センター(JICST)では、シソーラスのディスクリプタを選定する際、次のような選定基準を設けている¹²⁾。

- 1) ディスクリプタは与えられた概念に対して最も普遍的なものとする。したがって慣用されているものの他は、略語、略称、俗称、造語の類は、極力使用しないこと。
- 2) ディスクリプタは、排他的でなければならない。すなわち、多義性のない、意味の明確なものとする。
- 3) ディスクリプタは使用頻度が高く、検索時の質問に使用されるものとする。
- 4) ディスクリプタは、できるだけ複合度の少ない単純な概念のものとする。
- 5) すでに登録されたディスクリプタによっては表現できない概念を有するものでなければならない。

特に、3)で述べられている使用頻度は、ディスクリプタの選定に大きく影響を与えるため、通常、用語の頻度調査が行なわれる。本調査においても、雑誌記事索引から抽出した用語の頻度を集計した。しかし、この頻度に関する結果は、雑誌記事索引の絵画の分野を中心に5年間の文献のみを対象としているにすぎないため、選定に際しての基準とはせず、選定の参考とするにとどめた。

また、作品に関する情報(作者、所在地、形態、時代、表現方法、材料など)を扱うこととしているので、文献中での出現頻度は低くても、作品に関連する用語が必要となる可能性は高い。そのため、本シソーラスでは、「新潮世界美術小辞典・西洋編」の4,389項目のうち、地名、作品名、個人名を除く、1,720項目の用語を原則的にシソーラスに含めることとした。

3. ディスクリプタ間の関係の決定

用語の関係を確定する作業を行なうには、あらかじめカテゴリーを設けておくことが必要となる。カテゴリーを選定するにあたっては、その分野の既存の分類表をそのまま使用する場合と、シソーラスを作成のために新たに作成する場合とがある。

美術分野のシソーラスのカテゴリーを決定するには、これまでの検討結果から、次のことを考慮しなければならない。

- 1) 美術作品は、ある時代の特定地域の文化のなかから生まれたものであるため、美術史では、地域と

年代は深く係わりをもっている。したがって、地域と年代による分類は、美術の用語にとって必須の категорияになる。

- 2) 絵画、彫刻、建築という分野は、一般に美術の分類として取り上げられることが多いが、これらは芸術表現の手段であるにすぎないので必ずしも第一にとるべきカテゴリーではない。1)とも関連するが、ギリシャ建築に関する用語と日本の「寝殿造」という用語の間には、「建築」という共通点以外には、同一カテゴリーに入れるべき理由はないからである。
- 3) 表現材料、技法、様式、流派、その作品製作の背景となる文化、歴史、さらには宗教や神話からの題材というようなカテゴリーが必要となる。
- 4) 美術理論や美学に関する用語、美術館、文化政策、蒐集といった美術一般に関する用語のためのカテゴリーも必要である。

- 5) 美術の周辺領域、関連分野のカテゴリーを設ける必要がある。

以上の条件に基づいて、既存の分類表（日本十進分類法、国立国会図書館分類法、デューイ十進分類法、米国議会図書館分類法、国際十進分類法、コロン分類法、専門分類法 (South-East Essex College of Technology) を対象として検討を行なった。その結果、既存の分類表には前述の条件にかなうようなカテゴリーを持ち、そのまま使用できる分類表は存在しないことが確認されたため、上記の各種分類表、語彙調査、および「新潮世界美術小辞典」を参考として新たに第1図のようなカテゴリーを作成した。

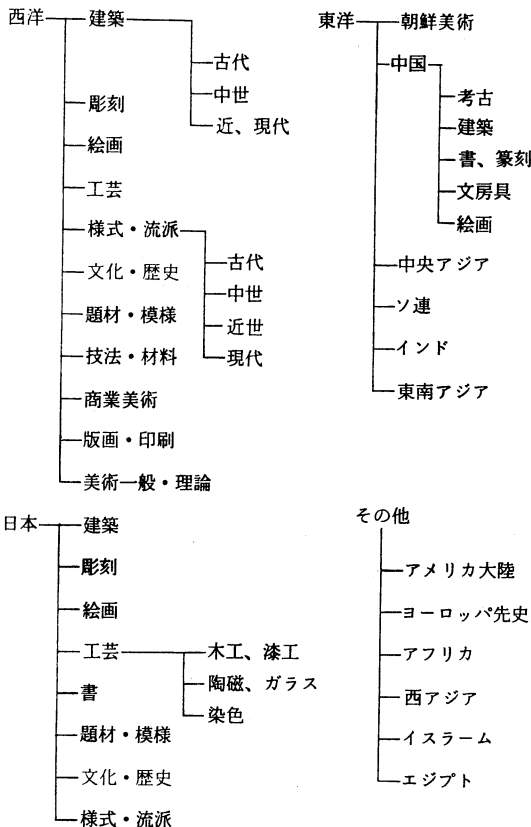
4. 編成

次に、このカテゴリーに応じ用語を分類し、関連語、上位語、下位語を選定する作業を行なった。その際、「新潮世界美術小辞典」の記述を参考にして用語の関係を定めた。

なお、枠の内側に表示したのがカテゴリー内の関連語及び下位語であり、枠の外側の語はカテゴリー外の関連語である。

以下に示す例では、下記のような表示方法をとっている。

- ・ は下位語を示す。
- ・ が多くなる程、さらに下位の概念を表す
- () は同義語の関係を示す
- … は関連語の関係を示す



第1図 美術ソソーラスのカテゴリー

E. 各カテゴリーの検討

1. 建築

建築に関する用語は、美術のソソーラスにおいて、最も広範囲で複雑である。これは、様式名（ゴシック様式、ルネッサンス様式など）、建築材料、構造名（窓、屋根など）、設計、設備、建築物（図書館、教会）と用語の範囲が広いうえ、時代と地域に関する用語が加わっているためである。

JICS 科学技術用語ソソーラス（1981年版）の土建分野では、24のサブカテゴリーを設けている。近代および現代の建築に関する用語には、これ程詳細なカテゴリーは必要としないが、ある程度の流用はできる。

しかし、古代、中世においては、神殿、教会、聖堂などが各時代の代表的な建築であるので、各々の建築の細部の用語を JICST のように詳細に分けるよりも、それ

中世

ゴシック様式 (一部)

- アーチ
- ・ 小壁付横断アーチ
 - ・ 尖頭アーチ
 - ・ ティンバナム
 - ・ 構造アーチ
 - ・ 円弧アーチ
 - ・ オジーアーチ
 - ・ テンダーアーチ
 - ・ 横断アーチ
 - ・ 水平アーチ
 - ・ 半円アーチ
 - ・ 壁付アーチ

第2図 カテゴリー「建築」の一部

それぞれの建築物の名称のもとに含めた方がわかりやすい。

もっとも、この方法では、各時代の「食堂」に関する事柄について調べたい場合など、「ローマの住宅」のもとに「ユエナクルム」(食堂の意)、「修道院」のもとに「食堂」、近代および現代では、「建築設計」のもとに「ドリクニウム」(食堂)が入ることになり、「食堂」の下位の用語として「ユエナクルム」、「修道院の食堂」、「ドリクリウム」が表示されているより、使用し難いことも考えられる。しかし、美術の分野に限定すれば、食堂に関する用語も限られているので、このような用語を相互参照で関連づけることも困難ではない。

また、中世建築におけるアーチとドームのように用語が多くそれらの関係が複雑なものは、どこまでをディסקリプタとして採用するのかを決定する際に、「技術」としての建築ではなく、美術史の中での建築において、その用語がどれ程必要であるかをまず検討する必要がある。

2. 絵画

絵画というカテゴリーのなかの用語の検討によれば、絵画に関する用語は、様式名、材料名、技法名に分けられる。様式名は絵画に関するものに限定した。様式名は、それぞれの様式が及ぼす影響から関連語を見つけたことはできるが、上位下位の関係は明確にしにくい。それは、様式名自体の定義が明確でなく、一つの時代、たとえば、ルネッサンス時代でも、イタリア、フランス、ドイツによって時期が違い、流派があり、流派も思潮よりは、画家の名によって定義がなされているからである。

そこで、絵画に関する様式名は、階層化せず、列挙的

中世

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ アーヘン宮廷画派 ・ ウインチェスター派 ・ ランス画派 ・ メッサ画派 ・ トゥール画派 ・ カンタベリー派 ・ フランコ・サクソン画派 | 写本絵画 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ クレタ派 ・ マケドニア派 | ハイパーノ
サクソン主義 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ ストロガノフ派 ・ シエフ派 ・ ジョッテスキ派 ・ トリヤー画派 ・ ヒルサウ派 ・ ライヒエナウ画派 | イコン

修道院 |
| <p>後期ゴシック・ルネサンス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ウンブリア派 ・ コスマーティ画家群 ・ ミラノ派 ・ バドヴァ派 ・ フィレンツェ派 ・ フェラーラ派 ・ フランコ・フラマン派 ・ ムラーノ派 ・ アントウェルペン・マニエリスト ・ ドナウ派 | モザイク
フリーズ

遠近法

フランドル派
国際ゴシック様式
後期ゴシック |

第3図 カテゴリー「絵画」の一部 (様式・流派)

に表示した。

また、様式名にスコープノートとして代表的な画家の名を含めておけば、その範囲を暗示的に示すことになり、また検索に役立つであろう。たとえば、「フィレンツェ派」は、

フィレンツェ派 Scuola Fiorentina (伊)

SN: イタリア、フィレンツェを中心に13世紀から16世紀にかけて活躍した画家たちに与えられた名称。チマブーエ、ジョット、オルカーニャ、マサッチオ、アンドレア、デル・カスターニ、ウッツェロ、フィリッポリッピ、フラ・アンジェリコ、ヴェロッキオ、ボライウォ

絵具

- ・油絵具
- ・アクリル絵具
- ・油性テンペラ
 - ・テンペラ
- ・ボディーカーラー
- ・ティステンパー
- ・ティント
- ・ビテューム
- ・ピストル
- ・フィンガーカラー
- ・乾性絵具
- ・アプレブラシ

フィクカティーク

パレット

油壺

アルシュ紙

カンヴァス

- ・F
- ・M
- ・P
- ・キット・キャット
- ・ノン・プレパル

画材

ケント紙

サムホール

マールスティック

木炭紙

羊皮紙

第4図 カテゴリー「絵画」の一部(技法・材料)

一口, ボッチェリ, レオナルド, ミケラン
ジェロ, アンドレア・デル・サルト, ポント
ルモ, クロンツィーノなど

と表示することになる。

材料, 技法名は, 絵画に関する用語, 素材に関する用語にまとめ, そのなかで上下関係を明らかにし, 関連語を見つけた。顔料に関する用語は, 用語間の関係に留意する必要はないが, 言語によって名称が異なるので, どの言語による用語をディスクリプタにするかを明示する必要がある。たとえば, 「ガランス」は, 天然の赤色染料であるが, フランス語は *garance*, *laque de*, 英語は *madder*, 独語は *krapp lack* である。そこで, 「ガランス」をディスクリプタとするなら,

ガランス (*garance* 仏)

UF: マダー (*madder* 英)

クラップラック (*krapp lack* 独)

と, 表示することになる。

3. 工芸

西洋工芸に関する用語は, 159語と比較的少ないため, 時代, 地域ごとに分けるとかえって煩雑となる。そこで, 陶芸, 織物, 金工, 家具調度というサブカテゴリーを作り分けたいえ, 必要に応じて地理区分によっても分けた。さらに家具, 調度に関しては, 椅子, テーブル, 戸棚, 燭台など使用目的別に細分できるのも工芸分野の特徴といえる。

ここで問題となるのは, 工芸, 建築に関する用語とその装飾との関係である。装飾に関する用語とその装飾対象が, 工芸, 建築双方に関連する場合が多いので, 別カテゴリーとした。

4. 芸術的表現の対象, 図象学, 題材

このカテゴリーには, 国際十進分類法における, 「7. 芸術, 美術, 写真, 音楽, 娯楽, スポーツ」に適用される固有補助標数04(第2表参照)に関する用語を配した。第5図では, 画題として「キリスト教図象学」を, 装飾文様として日本の一部を示した。

実際にキリスト教図象学の索引に関する用語を分類すると, 1. マリア伝, マリア像 2. キリスト伝, キリスト像 3. 聖者 4. 天使 5. 旧約聖書 6. その他に分類できる。これらのもとに画題となる主題や人名等を表示すれば, キリスト教図象学の索引を作成することができる。同様に, 神話やその他の画題に関してもシソーラスにおさめるのが可能となる。

また, 日本画に関しても, 「東洋画題総覧」¹⁸⁾等を参考に画題からの検索もできるシソーラスを作成した。

装飾文様に関しては種々の問題点がある。装飾文様は, 時代と地域によって多岐にわたり, また文様の組み合わせ, 応用が複雑であるのに, アラベスク, ギリシャ雷文, 雲形文字など固有名をもつ文様の用語は41語と少ない。しかし, 実際の建築, 工芸にほどこされた装飾文様は, 時代, 地域の文化の特徴を備え, 美術史の中で大きな役割を担っているのが欠かすことができない。また装飾文様は, その装飾対象が建築, 工芸の両分野にわたっており, 文様のモチーフと装飾対象との関連づけをおこなうことは難しい。しかしこの関係を用語と作品の両面から明らかにできれば, 美術史研究において, 建築, 工芸という表現手法を超えて, 装飾という新たな局面か

マリア伝 マリア像

- マリア
- ・ 受胎告知
 - ・ 聖母の死——キシメス
 - ・ 聖母の戴冠
 - ・ 聖母の七つの喜びと悲しみ
 - ・ 聖母の被昇天（聖母マリアの御眠り）
マリアの遷化）（アスンプティオ）
 - ・ マリアのエリザベト御訪問
 - ・ マリアの教育
 - ・ マリアの結婚
 - ・ マリアの誕生
 - ・ マリアの奉獻
 - ・ 無原罪の御孕理（童貞聖マリアの無原罪の御孕り）
 - ・ 簪選び
 - ・ 腰帯授与
 - ・ 聖母の十五玄義

- マリア像（一部）
- ・ 愛すべき母
 - ・ エレウーザ型の聖母子
 - ・ 王座のマドンナ
 - ・ オランス型の聖母
 - ・ 悲しみの聖母
 - ・ キュリオティック型聖母子
 - ・ 慈悲の聖母
 - ・ 授乳の聖母
 - ・ ニュボイア型の聖母
 - ・ 薔薇のマドンナ
 - ・ 弱鳥のマドンナ
 - ・ プラティラーラの型聖母子
 - ・ 星のマドンナ
 - ・ ホディギトリア型のマドンナ
 - ・ ユグニフィカート型のマドンナ

第5図 カテゴリー「画題」の一部

らのアプローチという有益な方法が提供されることになる。

装飾文様の分類には、二つの方法が考えられる。一つは時代と地域による分類、一つは装飾の要素による分類である。ここでは西洋装飾文様は、「装飾のハンドブック」¹⁴⁾、「装飾のスタイル」¹⁵⁾、日本の文様は、「図鑑日本の文様美術」¹⁶⁾を参考として装飾のカテゴリーを作成している。

5. 様式・流派

西洋装飾

- 中世
- ・ 初期ロンバルト・ビザンチン装飾
 - ・ イタリアの西ゴード装飾
 - ・ スペインの西ゴード装飾
 - ・ イタリアのイタロ・ビザンチン装飾
 - ・ フランク装飾
 - ・ ビザンチン装飾
 - ・ スペインのビザンチン装飾
 - ・ ロマネスク装飾
 - ・ ドイツ
 - ・ フランス
 - ・ 上部・中部イタリア
 - ・ シチリア・下部イタリアのサラセン・ノルマン装飾
 - ・ スペイン
 - ・ イギリス
 - ・ スカンジナビア
 - ・ ロシア装飾
 - ・ ゴシック装飾
 - ・ フランス
 - ・ ネーデルランド
 - ・ イギリス
 - ・ ドイツ・オーストリア
 - ・ イタリア
 - ・ スペイン

第6図 カテゴリー「装飾」の一部

「様式・流派」のカテゴリーの中に含まれる用語は、建築、絵画などという表現手法に限らず、一つの時代、思潮を表す用語である。

第I章でも述べたが、様式名においては明確な定義がなされていない用語が多く、関連語を網羅的に見付けだす作業も困難である。ここでは、カテゴリー外の関連語を網羅的に集めることはできなかったが、その様式に關係ある用語をできるだけ関連づけることができれば、その様式名を定義することにもなる。検索の面からみると、様式名からの検索では特定の範囲の狭い情報を得ることはできないが、相互参照によって関連づけのなされた用語のブラウジングによって、対象を明確にしておくことができるであろう。

6. 彫刻・版画

彫刻・版画に関する用語は96語と少なく、技法・材料名が多いのでシソーラスの作成には問題点は少ない。ここでは両者を別カテゴリーとしたが、技法的に彫刻と

幾何学的要素の文様

- ・直弧文
- ・三角文
- ・円文
- ・渦文
- ・条線文
- ・叢文

自然物の文様

- ・植物
 - ・蓮華文
 - ・忍冬文
 - ・宝相華文
 - ・葡萄文
 - ・桃実文
 - ・菊文、菊桐文、菊葵文
 - ・桐文
 - ・松文
 - ・竹文
 - ・梅文
 - ・松竹梅文
 - ・葵文
 - ・桜文
 - ・椿文

- ・柳文
- ・椰文
- ・樹木文
- ・柏文
- ・紅葉文
- ・藤文
- ・萩文
- ・牡丹文
- ・円花文
- ・けし文
- ・撫子文
- ・桔梗文
- ・りんどう文
- ・水仙文
- ・杜若文
- ・芦文
- ・朝顔文
- ・葉文
- ・鳶文
- ・柿文
- ・笹蔓文
- ・稲束文
- ・大根文
- ・その他の草花文

第7図 日本の文様 (一部)

銅版画などには共通している面もあるので一つのカテゴリーにまとめることもできる。

7. 美術一般, 理論

このカテゴリーには、国際十進分類法の固有補助標数、「01 一般理論, 美学, 鑑賞」, 「06 芸術についての各種の問題」, 「07 芸術への携わり方, 芸術家」, に関する用語を集めた。

この他に、美術の周辺領域、および美術と他の分野との関係を示すために社会、政治、文化、言語、文学、技術、自然などの用語を含めることができる。

そのため、このカテゴリーは、美術のシソーラスにおいて、最もカレントな用語が加えられる可能性があり、用語の管理、統制が難しくなる。これらの用語が多くなれば、それぞれ別個のカテゴリーを設定する必要が生じてくるであろう。

III. 美術シソーラスの問題点

A. 作成上の問題点

1. 用語の収集

- 美術学校 芸術学校
- ・バウハウス
 - ・エコール・デ・ボザール
 - ・美術アカデミー
 - ・ロイヤル・アカデミー
 - ・アカデミー

- 美術館 博物館
- ・美術館員
 - ・博物館員
 - ・ミュージオロジ

- 美術市場・コレクション
- ・ディレクタント
 - ・コレクター
 - ・パトロン
 - ・コスネール
 - ・画商
 - ・デュランニリュエル画廊
 - ・ベルネームニジェヌヌ画廊
 - ・コレクション
 - ・蒐集
 - ・競売場
 - ・模作
 - ・模倣
 - ・ミメーシス
 - ・贋作
 - ・鑑定
 - ・カタログ・レゾネ

第8図 カテゴリー「芸術美術・一般」の一部

科学技術分野では、論文の標題はその内容を要約している、という仮定にたち、論文の標題から用語を抽出し、シソーラスを作成する方法が用いられることが多い。

美術分野の論文の標題には、人名、作品、地名、といった固有名詞が多く、その上、先にあげた「中心」「考察」といった広い意味のストップワードが含まれていることが多い。「陶芸」の部門の調査では一標題あたりの平均語数が3.5語であり、用語に固有名詞が多いため、極めて多数の標題を抽出しなければならず、多くの労力と時間を費やす必要のあることは明らかである。

絵画に関する雑誌記事索引の標題3,642件から取り出した用語をLCSHの標目「Painting」、および「新潮世界美術小辞典」と比較してみると、広範囲の主題を網羅してはいたが、かなりの用語が含まれていなかった。し

美術シソーラスの問題点

たがって、美術に関する用語を収集する対象としては、標題や文章よりも、今回使用したような「新潮世界小辞典」のような包括的な辞典、あるいは絵画材料の辞典、装飾文様辞典、陶芸用語の辞典といった、各分野の専門的な用語集、辞典類を用いたほうが効率的であろう。

2. ディスクリプタの選定

ここでは、優先語の選定作業は、行なっていないが、先に述べたように、美術では作品に関してその付随情報が必要とされ、カレントアウェアネスは比較的少なく、遡及検索が多い、等の特徴のあることから、用語の頻度調査の結果のみをディスクリプタ選定の資料とするだけでなく、専門家や利用者の意見も加えた選定作業することがかなり重要になってくる。

また、美術情報の利用として、専門家（学者、研究者、芸術家、美術専攻の学生）ばかりでなく、一般の利用者をも考慮すると必ずしも専門用語のみを優先語とするわけにはいかない。そして、詳細な相互参照が不可欠となる。

3. ディスクリプタ間の関係の決定

ディスクリプタ間の関係を決定する際、まずカテゴリーを決定し、用語を分け、カテゴリー内で同義語、上位語、下位語、関連語を選び、その後、カテゴリー間における関係づけを行なった。しかし、こうした手順ではカテゴリーに用語を分類する際、たとえば絵画の様式に関する語は絵画のカテゴリーに加えるのか、あるいは絵画、版画の両方に使用される材料はいずれのカテゴリーに含めるのか、というような、カテゴリーへの分類を行なう上での優先順位の設定という問題がある。

そこで、ここでは、建築、絵画、彫刻という表現手法を優先し、それらのカテゴリーに限って使用される様式、材料は、「表現・手法」のカテゴリーに含めた。一方、表現手法に限定することのできない、時代全体を表すような様式（ルネッサンス、ゴシック等）は、「様式・流派」のカテゴリーに分類するという優先順位を定めた。

また、「材料・技法」というカテゴリーも絵画に関する材料、技法は、「絵画」へ、彫刻に関する技法は、「彫刻」へと分けると、第1図に示したカテゴリー案の「材料・技法」というカテゴリーは、不要となった。しかし、いくつかの表現手法で使用される材料、技法に関しては、双方に表示し、相互参照で示している。

用語間の関連づけは、「新潮世界小辞典」の記述を参照して行なったが、いくつか不備な点が残っている。LCSHには用語の階層関係は、明示されていないが、『を

も見よ (see also)』参照がその役割を果たしているの、関係を確認するのが困難であるカテゴリー間の関連語を見付けだすためには参考となる。

B. 美術分野のシソーラスの作成に関する留意点

美術におけるシソーラスの作成には以上のような問題点がある。したがって、シソーラスの作成にあたって以下のような点に留意しなければならない。

(1) シソーラスの他に作品名、作者名、地名などの典拠ファイルが必要とする。

美術情報は、前述のように文献の他に、作品、作品の代替物といった多様な形態からなり、用語には、作者、作品名、地名といった固有名詞が多い。そこで主題からの探索の他に、作者、作品名、地名（所蔵館）からの探索を容易にする手段は効果的である。それらの固有名詞は典拠管理を行ない、必要に応じシソーラスと対応させることが必要となる。

Chemical Abstract Services (CAS) の CAS 登録システムは、Structure file, Nomenclature file, Reference file の3つのファイルからなり、化合物の構造、名称、文献をリンクさせている。

このような管理方法を美術情報システムでも採用し、作者、作品名、所蔵館名の識別と名称の管理、さらにはそれらを文献情報と相互に関連づけを行なうことが必要である。

(2) 詳細な相互参照の準備

美術情報を必要とする利用者は、美術研究者、芸術家、美術館員、学生などの専門家だけでなく、一般の愛好家までにも広がっている。そこで、ディスクリプタが専門用語であると探索が困難になる場合も多いために、どのような用語から探索を始めてもシソーラス中の適切な用語が見付けだせるように、相互参照は、詳細で理解しやすいように準備しておく必要がある。

また、美術に関する用語の分類には、『何を優先させるのか』という問題が、絶えずつきまわってきている。Fawcett はシステナ教会堂に関する研究の主題索引を例に次のように述べている。

索引作成者が、システナ教会堂の天井画の影響についての研究に全ての望ましい主題、すなわち、「ミケランジェロ」、「イタリアのルネッサンス絵画」、「イタリアのフレスコ画」、「ローマの16世紀絵画」、「天井画」、「システナ教会堂、パチカン」、「旧約聖書の図」、「芸術における新プラトン」、「教皇の後援—16世紀」、

「芸術家の社会的地位, ルネッサンス」といった索引語を全て付与することはできない。

結局は他のアプローチもできるような相互参照に依存して索引語を遠括しなければならない。問題はそうにして選ばれた 2, 3 の主題はシステナ教会堂持つ多くの側面を全て満たしていないことである。したがって、索引作成者は多くの局面をとらえておらず、ただ 2, 3 語の用語を提供しているにすぎない⁴⁾。

以上からも美術のシソーラスにおいては相互参照が詳細で理解しやすいことが探索を行なう上で重要であることがわらう。

(3) 芸術表現の手法に応じた下位区分

絵画, 建築, 彫刻, 版画, 工芸などの各分野ではそれぞれ芸術表現手法によって用語に特徴があり, 画一的方法ではサブカテゴリーを定められない。そこで各々の特徴を考慮して各カテゴリーおよびその下位区分の構成を定め, 用語を関連づける作業を行なわなければならない。

たとえば技術としての建築分野における文献探索の特徴について菊岡俱也, 藤森英水は, 次のようにまとめている。

1. 二次資料の不備から, 建築情報の探索は, 資料より「人」を情報源として方が効率があがる。
2. 利用者の立場により求める事柄, 内容が多種多様である。
3. 2.との関連から, 関連他分野の文献情報が求められる傾向が強い。
4. 情報が公開されないことが多い。
5. 建築資料は, 文献形式のものだけでなく, 設計図, 仕様書, 工事写真, 検査登録, 経歴書, カタログ類, 告示通達を含む法令, 設計や施工のチェックリスト類, 試験データ, 工事記録など多様である¹⁷⁾。

このような建築分野の情報の特徴は, 美術としての「建築」にもあてはまり, 「建築」という分野が独自の構成を持っていることを示している。

(4) 更新, 維持への配慮

美術研究における情報の探索パターンは, 適及的探索が中心であり, 科学技術分野のようにカレントな探索はあまり多くない。しかし, 現代美術では関連他分野の情報の増大とともに, 用語数が増大していくことは, 不可避であると考えられる。新たなものと古いものとが共存

していることが美術情報の特徴でもある。用語の削除は少ないと考えられるが, 用語数の増加は対応するために更新に留意する必要がある。

(5) 国際的標準化への配慮

第 I 章において, 各国で美術の分野の主題検索のための標準化が徐々に進展しつつあることを述べた。これらのプロジェクトを詳細に調べること, 将来においては各国から美術作品, 資料等に直接アクセスするオンライン検索が可能ないようにシステムの開発を行なうことが求められる。

同時に, 美術に関する用語では多様な外国語が使用されているので, 日本語に翻訳するときの基準を定め, どの形を採用するかを決定を行なうことが望ましい。

IV. おわりに

美術の分野では国際的に適用しうるシソーラスが, まだ完成されていないため, 欧米においては個々の機関独自のシステムが開発されており, 利用者は混乱に陥っている状態である。

Slogget, T. は, “美術分野の 4 つの書誌的サービス, すなわち the Repertoire international de la Litterature de l'Art, the Art index, The Arts and Humanities Citation Index, the Repertoire d'Art et d'Archeologie は, オンラインでデータベースを利用することを考えている。これらのファイルのフォーマットはそれぞれ異なるが, それが実現に至るまでには主題からの探索が効率的にできるようになっているだろう¹⁸⁾”と述べている。

本稿では, シソーラスの試作を通じわが国では, 比較的検討されることの少ない美術分野のシソーラス作成に関する問題点を整理した。以上の検討から美術シソーラスの作成は十分可能であると言える。

- 1) Fawcett, Trevor. “The Problem of Artifact: Subject Limits of the Art Library”. Arlington, VA, Educational Resources Information Center, 1979. ED-185-987. 18 p.
- 2) Rinehart, Michael. “Art database and art bibliographies: a survey”. Art Libraries Journal. Vol. 7, No. 2, p. 17-31 (1982).
- 3) Fawcett, Trevor. “Subject indexing in the visual arts”. Art Libraries Journal, Vol. 4, No. 1, p. 5-17 (1979).
- 4) Peterson, Toni. “Computer-aided indexing in

美術シソーラスの問題点

- the arts; the case for a thesaurus of the art terms". *Art Libraries Journal*. Vol. 6, No. 3, p. 6-11 (1981).
- 5) "Summary report: Subject Analysis Committee, Subcommittee on Subject Heading for Individual Works of Art and Architecture". *RTSD Newsletter*. Vol. 5, No. 6, p. 63-66 (1980).
 - 6) Younger, Jeennifer. "Subject Heading for Individual Works of Art, Architecture, and Analogous Artifact and Structures: A Final Report". Chicago, ALA, 1981. ED-215-700. 22 p.
 - 7) Molholt, Pat, "The Art and Architecture Thesaurus: A Project Report". *Visual Resources*. Vol. 1, No. 2, 3, p. 193-199 (1980).
 - 8) Ohlgen, Thomas. H., "Image analysis and indexing in North America: a survey". *Art Libraries Journal*. Vol. 7, No. 2, p. 51-61 (1982).
 - 9) Molholt, Pat., "Art and Architecture Thesaurus". *Proceedings of the 44th ASIS Annual Meeting*. Lunin, L.F. ed. Washington, DC., 1981-10. New York, ASIS, 1981. p. 320-323.
 - 10) Molholt, Pat., "The Art and Architecture Thesaurus in the Online Catalog Environment". *Proceeding of the 45th ASIS Annual Meeting*, Petrarca, A.E. ed., Ohio, 1982. New York, ASIS, 1982. p. 372-373.
 - 11) 笹森勝之助, "シソーラス". *ドクメンテーション研究*. Vol. 20, No. 1, p. 15-21 (1970).
 - 12) 斉藤和男, "JICST 科学技術用語シソーラスの編成経緯". *情報管理*. Vol. 18, No. 5, p- 390-398 (1975).
 - 13) 金井紫雲. "東洋画題総覧". 東京, 歴史図書社, 1975. 1200 p.
 - 14) Meyer, F. S., "装飾のハンドブック". 毛利昇訳. 東京, 東京美術, 1966. 487 p.
 - 15) Speltz, Alexander, "装飾のスタイル". 毛利昇訳, 東京, 東京美術, 1977. 649 p.
 - 16) 毛利 昇編. "図鑑日本の文様美術". 東京, 東京美術, 1969, 298 p.
 - 17) 菊岡俱也, 藤森英水. "講座文献調査法: 建築学, 土木工学". *情報管理*. Vol. 18, No. 9, p. 754-771 (1975).
 - 18) Sloggett, Tony, "Introduction". *ART Bibliographies MODERN*. Vol. 14, No. 1, p. iv (1983).